

「路地のあるまちが良い」

今井 晴彦

路地のまちが良いと感じていますが、少し何故そうなのか理屈を述べてみようと思います。どこか同感されるところがあると思われる方が増えれば、多少とも路地のまちの評価が変わるのではないかと思います

かつては、日本中路地だらけであった。というより、人間が歩いて暮らすに適度な幅のある道があればよく、幅員の広い道路はごく限られていた。どの程度かは分からないが、昔から人々の暮らしを支えたこれらの道は、現代にもひっそりと残っている。建物であれば、文化財などに指定され、人々に有難がられるほどの歴史がありながら、道は忘れ去られそのまま残っている。そういう路地を歩けば、昔からの神社やお寺に出会うことも多く、またお地蔵さんが路傍に立っていたり、時には昔からの街並みがなんとか生き残っていたりする。路地は過去と現在をつなぐ道でもある。近代に自動車を走らせるために至るところに整備された広幅員の道路には、こういうことは無い。

その昔の路地は、いわば下層階級に属する人達の暮らしの場ともなっている。裏店で開業し、熱心に商売に励む、うまく金が溜まれば表通の店に昇格していく。いわば都市のインキュベーターとしての役割や、社会的に恵まれない人が落ちこぼれず暮らしてゆけるセーフティネットとしての役割などを担って来た。これは現代にも多少引き継がれているように思える。広幅員の幹線道路沿道には、立派なビルが立ち並び、それなりの企業の看板とか洒落たお店などが立地しているが、一步裏通りに入ると古びたビルがチマチマと、小さな企業や店を抱え込み、時にはまだ売れないアーティストが頑張っていたりする。その人達が次のまちを支えるかもしれない。またそのような空間や環境が提供されることで都市は多くの人に開かれ、新しい文化や産業が生まれ、活性化するのではないか。金ピカな都市空間だけの都市は、このような多様性のない裸の王様である。海でいえばサンゴ礁が路地。サンゴのおかげで大きな魚が入り込めず、幼魚や様々な生物がそこで育ち生きていくことを保証しており、それが海を豊にしているのである。人間に引き付けて考えても、路地は次世代を担う子どもの遊び場でもある。特に現代では、車が我が物顔にどんな所でも走り回り、子どもの遊び場を奪っている。このため、モータリゼーションと共に、子どもは次第に屋外では遊ばず、家に閉じこもってしまい、他人とつきあったり、自ら遊びを工夫したり、好奇心を発揮したりと健全に育つ手立てを失っている。次世代がまともに育たないような都市は、持続可能性のある社会からは程遠い。確かジェーン・ジェイコブスも都市が生き残るには路地が必要と saying いた。もっとも路地だけでは、都市の経済や様々な社会サービスを効率的にまかなえず、衰退してしまうであろう。要は広幅員の道と路地とがうまく長所を活かしながら共生しているまちが良いということである。路地をもっぱら負の遺産として、その撲滅にまい進した結果、都市が衰退してしまっは元も子もない。

このように考えると路地は、過去と未来とをつなぐ存在でもある。しかしつなぐのはそれだけで

はない。現にそのまちにいる人をつないでいる。よく言われるのは、路地のまちでは、人と人とのコミュニケーション、或いは団結力があるということである。ただ広い道路の両側に住んでも、その両側に住む人同士の交流はよほどのことでもなければ発生しない。高齢者ともなれば、横断も困難となって、反対側とは永遠のお別れとなってしまふ。しかし路地では、いやがおうでも間じかに顔を合わす日々となる。一人暮らしの高齢者が激増する時代では、孤独死を少しでも防ごうと思ったら、路地のまちを活用するのが合理的である。また路地で子ども同士が遊ぶことから、それが接着剤となって、大人の付き合いも生まれる。

以上のように路地は都市に不可欠な存在であるが、その狭さが人を引き付ける要因ともなっている。まず車にひき殺される確立が低い。歩道を歩いていても、良くニュースになるように高速の車に片端から撥ね飛ばされる。しかし路地では、そもそも車が侵入できないか、できても遅い速度でしか通行できない。怪我をしてもまず殺されることはない。従って安心して歩くことができる。また道路を横断するために、暑かろうが寒かろうが、信号機が変わるのをまって歩道上で耐え忍ぶ必要もない。歩いて暮らせるまちとは、路地のまちといって過言でない。路地はまた長い歴史をへたものもあり、適度に曲がっていたり、横道があったりと、歩くには都合よくできている。広幅員道路の歩道ばかりを歩くのでは、街歩きも成立しないであろう。家から駅まで通勤のために歩く人でも、わざわざ路地を選びながら目的地に向かっている光景はよく見かける。また歩いていけば、見事な庭木があったり、路地の園芸があったり、色々と細かなまちの息づくさまが観察でき、それが楽しみともなる。企業などの看板と道路標識を眺めながら歩くよりよほど楽しい。寒い季節など強力な寒風が肌をさす大通りから、一步路地に入るとピタッと風がなげ、ほっと一息ついた経験のある方も多いであろう。或いは夏の暑い日差しも、隠れようもない直線的な幹線道路に比べ、路地は適度に屈曲して影を生み出している場合もある。広幅員の道は車のために、路地は人のために、或いは人を守るように出来上がっていると考えれば、やはり歩く人は路地である。

さらに、そこに歴史的な街並みなどがあれば、強力な観光資源である。バスや車で、各地のスポットをめぐる楽しみ方と異なったまち歩き観光が、近年中高年層を中心に盛んとなっているが、路地の観光では自らが様々な発見をしたり、地域との交流があったり、楽しみ方も多様であり、また歩くこと自体の楽しさも手伝って、人々を引き付けている。また商店街でも路地系の形態となって、賑わっている事例も見られる。そもそも買い物をするのに車が気になるようでは、楽しい買い物もできない。車社会の権化のような郊外大型商業施設でも、車をおいて店内に入ればどこにも車はいないのである。このように、路地はその人を引き付ける魅力がまちを活性化する力となっている場合もある。

以上のように路地は、都市社会にとってはなくてはならない様々な役割を担っており、一層路地の特性を認識し、それをいかしたまちづくりを進めることが重要であると思っています。